様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９３２００１６
研究課題名（和文）　「供養の文化」の比較研究をとおして見る「死」の表象の形成過程とその現代的変容
研究課題名（英文）　The historical process of the representation of “death” and its contemporary change, illuminated through a comparative study of the “culture of *kuyo* (spiritual aid for the dead)”

研究代表者
池上　良正（IKEGAMI YOSHIMASA）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：60122925

研究成果の概要（和文）:「供養の文化」を日本の民俗宗教の重要な特徴のひとつとして位置づけることによって、古代・中世から近現代にいたる、その歴史的変遷の一端を解明することができた。さらに、フィールドワークを通して、中国・韓国を含めた現代の東アジア地域における「供養の文化」の活性化や変貌の実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）: Regarding the “culture of *kuyo*” as one of the crucial characteristics of Japanese folk religion, this project clarifies some aspects of its historical process through the ancient and middle ages to modern times.
In addition, based on intensive field research it reveals the revitalization of the “culture of *kuyo*” and its drastic changes among contemporary East Asian areas, including mainland China and Korea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2008 年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2009 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総　計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：供養・死・葬送・死生観・霊魂観・環境・東アジア・怨霊

１．研究開始当初の背景
当初の申請者であった中村生雄は著書『祭祀と供犠―日本人の自然観・動物観―』(2001 年)において、野生動物および家畜として飼育されている動物の生命を奪う行為に付随する罪責感を解消・軽減する方法として、人類文化はおおむね二つに大別されるとの見通しを示した。

第一は動物を神の賜物と見なす「供犠の文化」、第二は殺した動物の霊を弔う「供養の文化」である。東アジアを射程において、この関係を深めることが今後の課題として示された。また、編著『思想の身体―死の巻』（2006 年）では、現代日本の葬送儀礼や墓制の急速な変容過程が、大きなテーマとして指摘され、それを「供養の文化」の歴史的・構造的な広がりのなかで、学際的に問うことの重要性が、今回の科研メンバーの共通認識となっていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本における民俗宗教的な死者儀礼をささえる霊魂観や死後イメージの特徴を「供養の文化」という文化類型のもとに把握し、その歴史的・宗教思想的な形成過程を東アジア世界との比較をとおして解明すること、さらに、今後の日本社会の動向においてそれがどのような意義と問題点をもつものであるかを、とりわけ現在大きく変容しつつある「死」の表象の行方を問うことを通じて、学際的・領域横断的に明らかにすることであった。

具体的な課題は次の３点に要約される。

(1)「供養の文化」に関する比較宗教学的・比較文化論的な考察。

(2)日本における「供養の文化」と「死」の表象に関する学際的な考察。

(3)東アジア諸地域における「供養の文化」の実態研究。

３．研究の方法

研究代表者、分担者、連携研究者は、それぞれ宗教学、歴史学、思想史学、社会学、文学など、領域を異にしているため、一方では、各自の専門的方法を生かした個別研究を進めるとともに、他方で、日本国内、中国、韓国における共同の実地調査を積み重ねることによって、互いの知見を交換し、学際的な成果に結びつけるよう努力した。

４．研究成果

(1)本科研の当初の申請者であった中村生雄は期間中の体調不良のため、最終年度は代表者を辞して連携研究者として参加したが、つねに研究全体の方向性を示し、プロジェクトを統括した。

概括的結論として明らかにしえたのは、現代という時代が、伝統的な「供養の文化」に大きな地殻変動が起こっており、それは、「供養の文化」を推進する主体が、供養される側（死者）から供養する側（生者）へと決定的に移行してしまったという事実である。「千の風になって」や「おくりびと」への圧倒的な支持は、まさにそのことを物語っている。

こうした、いわば死者イメージをめぐる脱宗教化、あるいは“死者の行方”にかんする無関心という事態は、もはや抗いがたい時代の趨勢である。しかし、気になるのは、そのようにして供養する側（生者）の都合によってイメージされた死と死者が、ひたすら美しく優しいもの一色に塗り込められていて、死にまつわる残酷さとか、死者の怨みや絶望といった負の部分がみごとに無視されていることだ。そうした状況は、森岡正博が問題視する「無痛文明」そのものであるとも言える。

(2)池上良正は、黄強（中部大学教授）の協力のもとに中国の経済先進地域における「死者供養仏教」の復興現象を調査し、「死者供養」を東アジア地域に広く普及した救済システムとして捉え、「日本の仏教だけが祖先崇拝や死者儀礼と過度に結びついた特殊な仏教である」といった従来の「日本仏教特殊論」を相対化する視点が重要であることを、明らかにした。

さらに「死者供養」的実践に注目することは、男性仏教者のみに特化した従来の仏教研究の歪みを正し、女性を担い手とする民衆仏教の実態に目を向ける契機となること、などを示した。

(3)井上治代は、韓国における供養文化の変化と変容に関する社会学的研究をテーマと

して、高度経済成長による社会変動にともなう死者供養の変化や、現代韓国における仏教的死者供養である四十九斎・預修斎について調査研究した。具体的には、〈場〉からのアプローチとして、主に「供養施設」（病院付属斎場、火葬場、墓地、葬礼施設）を通じ、韓国における供養文化の変化を把握し、〈人〉からのアプローチとして、葬礼を経験した遺族を対象として面接調査を実施し、親子２世代にわたる葬礼のあり方から、その変化を探った。また、韓国における新しい葬法として登場した「樹木葬」についての調査研究を行なった。

これらを通して、高度経済成長によって社会変動が起きた現代社会では、複雑な儒教儀礼は生活から遊離したものとなり、現代人はその生活様式に適合した儀礼を模索していること、死者儀礼の簡素化は韓国政府も推進していること、したがって政府の方針という大義名分を持ちながら、親を手厚くもてなすという「孝」の意識もなくなったわけではないことなどが、明らかになった。

(4)岡田真美子は、大上泰弘（帝人ファーマ（株）生物医療総合研究所・主任研究員・生命工学、技術者倫理）、VELDKAMP, Elmer（東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 文化人類学コース・博士後期課程）、全成坤 チョン・ソンコン（通訳/案内：高麗大学校日本学研究センター研究教授）などの協力のもとに、日韓の実験動物供養の起こりと変遷、その精神および儀礼に反映している宗教性を明らかにした。

具体的成果は以下の４点である。

①これまで不明であった実験動物供養草創期の状況がかなり明らかになった。すなわちその起こりは現在文献やフィールドワークでたどれる限りでは、大正時代以降の供養碑建立、供養祭発生である。

②今日も日韓両国で実験動物供養が現代的に変容しつつ再生・継承されている。

③動物供養の基層概念、すなわち人間と動物の生命は質的に異ならないという生命観は、韓日両国で共通していて東アジア的生命観というべきものである。

④実験動物供養儀礼は上記の生命観に儒教などの「魂」思想が融合的に反映した形態で継承されている。

(5)佐藤弘夫は、日本列島における死の認識の始原と死後世界の概念の展開を辿るとともに、それと平行して進展する死者供養をめぐる儀礼と思想の実態を明らかにした。従来個別の事例について論じられてきた「人がカミになる」思想の系譜を、日本列島について、その変化を追いながら体系的・通史的に明らかした。

日本列島では縄文時代の後期から、死者の身体から自立した霊魂の観念が成長し、それはやがて死後も継続する人格＝タマとして把握されるようになった。特定の人物をカミとみなすヒトガミの観念についていえば、巨大な墳墓が造られた古墳時代には、被葬者を超越的存在＝カミとする見方はすでに存在したと考えられるが、それが墳墓に常駐して共同体を加護するという観念までは生まれなかった。七世紀末にいたってはじめて、歴代の天皇の霊魂が特定の地に祀られて、国家を守護するカミとして位置づけられるに至った。

カミになる死者の観念の成立は、その対極に邪悪な死霊の観念を生み出し、八世紀には御霊として広く社会に共有された。国家や民衆は御霊をカミとして祀り、特定の地に定着させることによって、それを悪霊からカミへと転換させ、制御可能な存在にしようと試みた。その御霊も中世に入ると仏教の本地−垂迹のコスモロジーに組み込まれて合理的性格を強め、彼岸の仏の垂迹＝救済者としての性格を強めていく。

中世までは神になることのできる人物は、生前に特別の地位にあったり、あるいは大衆に強い印象を残したりした人々だった。それに対して、近世になるとはじめて一般人がカミとなる信仰が登場する。各地に残る人柱伝承や義民伝承は、みずからの意志によって身

を犠牲にした人物をカミとして顕彰するシステムであり、中世の御霊信仰とははっきりとした断絶があった。

近世後期の民衆宗教の神観念はそうした近世的なヒトガミの観念を前提としたものであり、靖国神社はそれを国家の側に独占的に取り込もうとしたところに生まれてくる新しい信仰の形態だった。

(6)兵藤裕己は、国文学の立場から、供養の文化としての『平家物語』の成立について考察した。

慈円の『愚管抄』は、仏神の冥慮とともに「その上は平家の多く怨霊もあり」（巻五）として、世の中の移り変わりに、冥界のモノ（慈円のいう「冥衆」）のはたらきによる「道理」をみようとした書である。慈円は、建久三年から建保二年（1192～1214）まで、つごう四度、天台座主（比叡山延暦寺の最高位の僧職）をつとめている。宗教界の最高位にあり、しかも後鳥羽上皇の護持僧だったかれの任務は、冥界のモノをまつり鎮めることで、天下万民の安寧をはかることである。『愚管抄』でしばしば怨霊のたたりについて記す慈円は、元久元（1204）年、三条白河に大懺法院を建立し、翌年それを後鳥羽上皇に献上した。

大懺法院では、保元以後の「怨霊・亡卒」を「回向」（供養）することで、国家の「安穏泰平」が祈願された。慈円の発願文からは、怨霊の供養がいかに重大事と認識されていたかがうかがえる。後鳥羽上皇の御願寺となった大懺法院とは、まさに国家的規模で建立された怨霊供養の寺院だった。

ところで、『徒然草』二二六段には、慈円が『平家物語』の成立に関与したとする、古来有名な『平家物語』成立伝承が記されている。すなわち、慈円が「一芸あるものをば下部までも召しおきて」庇護したなかに、「信濃前司行長」という遁世者があり、かれが「平家物語を作」って、「生仏」という「盲目」に教えて語らせたというのである。『徒然草』が伝える「信濃前司行長」作者説にもかかわらず、しかし平家物語は、ひとりの作者によって一からつくられたものではない。それは、当時さまざまなかたちで行なわれていた平家にまつわる物語（話材）が寄せあつめられ、編纂されて成ったものである。

(7)松尾剛次は、主に戒律と葬送に注目して「供養の文化」研究を行った。

とくに、①13・14 世紀に作成された高さが 2 メートルを超える巨大五輪塔（墓所）の建立主体が、戒律を重視する律宗教団（奈良西大寺叡尊をいわば祖師とした）であること、②その背景に戒律護持などによって兜率天に往生し、あるいは兜率天に往生できなくても釈迦滅後 56 億 7 千万年後の弥勒下生にあずかりたいという、弥勒信仰があり、③そのために、花崗岩・安山岩といった硬い石（56 億 7 千万年保たせるため）で、2 メートルを超える巨大五輪塔が建てられたこと、などを明らかにできた。また、親鸞の伝記研究なども行なった。

(8)さらに中村と池上は、松崎圭（慶応大学・大学院生）らの協力のもとに、東京 23 区内における動物供養碑の資料収集に着手し、そのデータベース化を進めた。現在それらは管理画面として保持されているが、プライバシー保護の問題などを検討したうえで、将来的にはインターネットに公開したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①池上良正　「上海市における「死者供養仏教」の活性化―松隠禅寺の事例を中心に―」駒澤大学『文化』第 28 号、2010、pp. 29-54.

②井上治代　「現代韓国における死者供養の変化についての社会学的考察―四十九斎・預修斎を中心に―」『ライフデザイン

学研究』５号　東洋大学ライフデザイン学部　2010、pp7-30
③岡田真美子　「エコロジーとスピリチュアリティ」『現代宗教 10』査読有、2010、印刷中。
④池上良正　「葬式仏教から死者供養仏教へ」浄土宗『宗報』、査読有、第 1075 号、2009、pp. 56-78.
⑤佐藤弘夫　「前方後円墳に宿るもの―祖霊観の系譜からみた」『死の機能　前方後円墳とは何か』岩田書院、2009、pp. 101ー131.
⑥佐藤弘夫　「死者は山に棲むか」『アジア遊学　東アジアの死者の行方と葬儀』勉誠出版、査読有、2009、pp. 13ー19.
⑦池上良正　「現代中国の仏教復興―上海市の寺院調査から―」駒澤大学『文化』第 26 号、2008、pp. 5-43.
⑧松尾剛次　「新発見の五点の中世浄住寺文書-中世安堵制に関する一考察-」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第９号、山形大学歴史・地理・人類学研究会、2008、pp. 13-20.
⑨松尾剛次　「叡尊教団と中世都市平安京」『戒律文化第６号』査読有、戒律文化研究会、2008、pp. 1-29.
⑩ MATSUO Kenji　“The Life of Eizon”（Translated by Ugo Dessi）*THE EASTERN BUDDHIST*, 査読有、Vol.39 No.2、2008、pp.95-123.

〔学会発表〕（計１件）
①池上良正、井上治代、岡田真美子、佐藤弘夫、中村生雄、パネル発表「死者供養文化の深層」日本宗教学会第 68 回学術大会、2009 年９月 12 日、京都大学。

〔図書〕（計５件）
①松尾剛次　『親鸞再考 僧にあらず、俗にあらず』日本放送出版協会、2010 年２月、189 頁。
②兵藤裕己　『琵琶法師―〈異界〉を語る人びと』岩波新書、2009 年４月、203 頁。
③松尾剛次　『山をおりた親鸞　都をすてた道元』、法蔵館、2009 年２月、201 頁。
④松尾剛次　『破戒と男色の仏教史』平凡社、2008 年 11 月、207 頁。
⑤佐藤弘夫　『死者のゆくえ』岩田書院、2008 年、３月、249 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等　現在は特にないが、将来的には先述の「動物供養碑データベース」を公開の予定。

６．研究組織
(1)研究代表者
池上　良正（IKEGAMI YOSHIMASA）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：60122925
(2)研究分担者
井上　治代（INOUE HARUYO）
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：10408974
岡田　真美子（OKADA MAMIKO）
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号：40185450
佐藤　弘夫（SATO HIROO）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30125570
兵藤　裕己（HYODO HIROMI）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：90173230
松尾　剛次（MATUO KENJI）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30143077
(3)連携研究者
中村　生雄（NAKAMURA IKUO）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：50217832